

ニコライ 2 世に贈呈された「薩摩焼」を求めて

2017 年 8 月 3 日

■エルミタージュ美術館

8 月 1 日の桜植樹を終えた赤堀代表以下、薩露交流促進協議会有志メンバー及び野間健衆院議員は、8 月 3 日、サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館に向かった。



我々一行がエルミタージュに向かった目的は、以下の事由からである。

ニコライ 2 世は皇太子時代に、国賓として来日。島津忠義公は、明治天皇の名代として歓待。その5日後、大津事件に遭い傷を負った。国賓で来日したニコライ皇太子の遭難に対し、明治天皇他皇族、政府、日本全国各地からお見舞い品が届けられた。このお見舞い品の多くがエルミタージュに収蔵されていると云われる。

中でも、来鹿記念に島津忠義公が贈呈した薩摩焼は、特注で沈寿官により制作されたもの。また、薩摩での歓待の礼に、ロマノフ王朝皇帝アレクサンドル 3 世(当時のニコライ皇太子の父)から、島津忠義公に勲章が贈呈された、という歴史的経緯がある。

薩摩とロシア、さらには日本とロシアとの関係の深さを知る上での歴史的貴重な資料である薩摩焼が、このエルミタージュ美術館に収蔵されているとのことだが、その実物をぜひ、見て確かめたいとの思いがあった。

また、在日ロシア大使館側から、今秋 11 月にロシア革命 100 年を記念して開催予定の展示会で、ニコライ 2 世が日本から持ち帰った品々を中心に披露したいとの計画と共に、忠義公に贈呈された勲章の貸し出し依頼の意向も耳にした由もある。

聖ヴァシリイ財団の紹介で訪れたエルミタージュ美術館では、副館長に会い、上記の事柄を含めた対談を行なった。

ちなみに、エルミタージュ美術館の館長という地位は、日本で思うところの単なる「館長」ではなく、ロシアにおいては大臣級の権威を持っているらしい。

エルミタージュ
美術館副館長(右)
と対談する
赤堀代表、
野間議員ら



エルミタージュ副館長らと共に



副館長曰く、今秋 11 月にはエルミタージュ美術館では、ニコライ皇帝ファミリー関連の展示会は計画されていない。然しながら、ニコライ皇帝ファミリーが死去して 100 年にあたる来季(時期は未定)に、展示会の計画を持っているとのこと。

具体的内容が決まり、その時期が来たら、島津忠義公に贈呈された 2 個の勲章の貸し出し依頼等の検討もしたいとの意向も伺った。

あいにく、エルミタージュ収蔵の薩摩焼は、現時点での目視検査では繊細で壊れやすい状態ではないかとの見解であった。

エルミタージュ収蔵と云われている薩摩焼は、展示室で公開されておらず、目にすることは出来なかった。

野間議員は、エルミタージュ副館長と対談後、帰国。

館内視察後、ロシア側から、島津忠義公が贈呈した薩摩焼の 2 つのうちの一つがエルミタージュとは別のところにあるとの情報を得てそこへ向かった。

エルミタージュ館内の案内を受ける赤堀代表、野間議員、亀澤宣秀始良ふるさと大使他メンバー達



■ニコライ皇太子に贈呈された薩摩焼

文化省管轄下にある館に、正に目指す薩摩焼が展示されていた。



島津忠義公よりニコライ皇太子に贈呈された薩摩焼の茶壺
赤堀代表の左隣はブラソフ・ガリーナ女史



ニコライ皇太子に贈呈された
美しい薩摩焼茶壺



ロマノフ王家の紋章

沈寿官に制作させたと云うその薩摩焼の茶壺は、ロマノフ王家の紋章が描かれており、正に特注であったことが伺える。

「陶器の番人」と呼ばれるブラソフ・ガリーナ女史に、鹿児島からニコライ皇太子に贈った薩摩焼を求めて来たという事情を説明した処、展示の茶壺以外にも、収蔵庫にその当時の薩摩焼6点を収蔵しているとのこと。

収蔵庫への入室を特別に許可して頂き、その薩摩焼を見せて貰う事ができた。

残念ながら、ロシアに持ち帰った時点で、一点のみ、壺の口が割れてしまったものもあったが、それ以外はほぼ良好な状態で保管されていた。

収蔵庫に案内する ブラソフ・ガリーナ女史



収蔵庫から次々と取り出される 薩摩焼に見入る 有志メンバー亀澤氏と赤堀代表



ロシア文化省では今秋 11 月にニコライ皇太子日本訪問時にまつわる品々を展示して欲しい旨、エルミタージュ美術館に依頼していたが、前述した通り、エルミタージュ美術館側は、文化省の要請に対して内部事情もあり今年秋には開催できないとの件も女史に伝えた。

ブラソフ・ガリーナ女史が務める館は、文化省の管轄である。

ブラソフ女史からは、要望があれば、展示しているニコライ皇太子に贈呈した薩摩焼を、文化省の許可次第では日本に貸し出す可能性もあり得るとの言質を得ることが出来た。

■日本大使館

8月4日、薩露交流促進協議会赤堀代表以下有志メンバーとヴァシリー財団関係者は、在モスクワ日本大使館上月大使を表敬訪問した。

ヴァシリー財団セルゲイ・リュドフ理事長からは、まずニコライ皇帝一家慰霊碑除幕式及び桜植樹に贈られた上月大使のメッセージに対して、御礼の辞が述べられた。

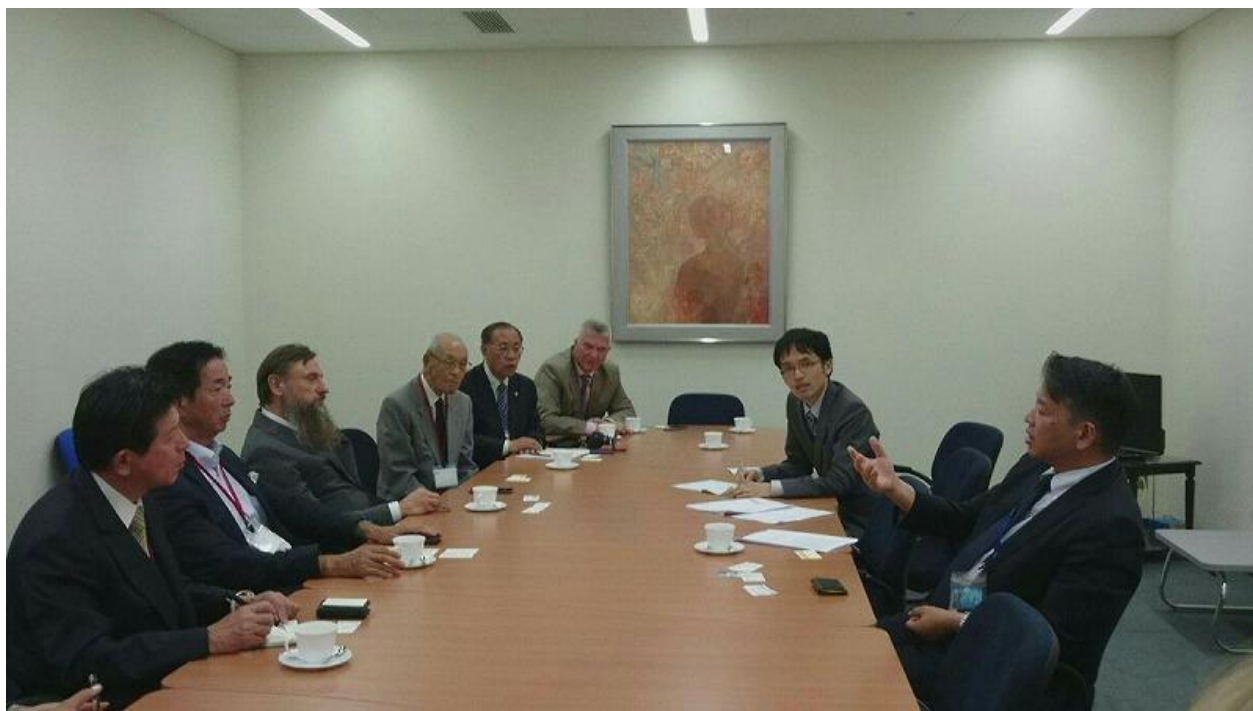
ヴァシリー財団理事長と握手を交わす大使



知己あるヴァシリー財団副理事長と



8月1日、ロシア正教聖地での私共の桜植樹に関して上月大使から、自身、「ロシアでの4回の赴任、滞在20年の中において、私の知る限り安倍晋太郎(安倍晋三の父)が外務大臣在任中の1986年にモスクワで市の日本庭園の一角に桜植樹をしたのが最初だと思います。ただ、ロシア正教会聖ワシリー財団の要請で、聖人セラフィム・サロフスキー誕生の聖地での桜植樹というのは、きわめて異例の事だと思います。今回、『日本の心』桜の植樹を通じて、薩露交流促進協議会が、日本とロシアを結びつけることに果たした役割は、大変意義がある。」とのねぎらいの言葉を頂いた。



赤堀代表、亀澤氏の名前をあげ、意義ある桜植樹を行ったことにねぎらいの言葉をかける上月大使